

must/had better/should に関する
動機づけとメンタル・スペース

長 友 俊 一 郎

(関西外国語大学英語国際学部 准教授)

松 山 大 学
言語文化研究 第38巻第1 - 2号 (抜刷)
2018年9月

Matsuyama University
Studies in Language and Literature
Vol. 38 No. 1-2 September 2018

must/had better/should に関する 動機づけとメンタル・スペース*

長 友 俊 一 郎[†]

1. は じ め に

本稿では、「動機づけ」(motivation)と「メンタル・スペース」(mental spaces)の観点から(「義務」や「必要」といった)「束縛的モダリティ」(deontic modality)を表す must と had better と should を分析する。本研究の目的は、束縛的モダリティにおいては、原則として動機づけが存在することを実証することと、must と had better と should に関する、力の強さや種類、動機づけのタイプ、言語行為、メンタル・スペース構築を明らかにすることにより、意味論的・語用論的に各表現の特徴を比較することにある。

第2節では、義務づけの意味論的特徴を踏まえた上で、動機づけの概念を概観する。第3節では、メンタル・スペースの概念を紹介し、その概念を援用した法助動詞分析を素描する。第4節では、must と had better と should の表す力の強さを、事象の実現が前提とされるかといった観点から検証する。第5節では、各法助動詞の表す力の強さと種類に着目し、各法助動詞とどのような動機づけが呼応し得るかを考察する。さらには、各法助動詞が促すメンタル・スペース構築を提出する。

[†] 関西外国語大学英語国際学部 准教授

2. 束縛的モダリティと動機づけ

Tregidgo (1982: 78) は、束縛的モダリティを表す *must* の意味構造を(1)のように提示した。

- (1) *a must b* = X DEMAND Y – Y CAUSE – ab

ここでの X と Y は、それぞれ、義務づけの行為の主体と客体を表している。DEMAND は、「要請」を表している。すなわち、*must* の意味構造は、「X が Y に対して [a が b する] という命題内容を引き起こすように要請する」とされる。たとえば、(2)は、

- (2) You *must* go ! (Tregidgo 1982: 79)

「話し手 (=X) が聞き手 (=Y) に対してすぐに行くことを要請する」と分析され得る。Tregidgo によれば、(3)では、「私」もしくは「礼儀」、(4)では、「バス会社の規則」、(5)では、「文法」が主体となるとされている。

- (3) You *must* apologise at once!
 (4) All cars *must* have number-plates.
 (5) The verb *must* agree with its subject.

((3)–(5): Tregidgo 1982: 79)

Sweetser (1990) によれば、英語法助動詞の意味は、根源的、認識的、言語行為的に分けられる。これらの意味は、各法助動詞の「イメージスキーマ的な構造」(image-schematic structure) に基づく領域から領域（たとえば、現実世界領域から認識世界領域）への「メタファー的写像」(metaphorical mapping) に

よって生じるものであるとされている。前者は後者を通して保持されなければならないものである。この写像によって、より具体的な（現実世界）領域に関するより直接的経験に基づく理解を通して、より抽象的な（認識）領域の理解がさらに構造化される（Sweetser 1990: 59）。次の例を見られたい。

(6) You *must* come home by ten. (Mom said so.) (Sweetser 1990: 61)

must のイメージスキーマが現実世界領域に適用された場合、(7)のような、社会物理的な抗い難い「強制」(compulsion)の力関係が表されるとされる（Sweetser 1990: 61）。

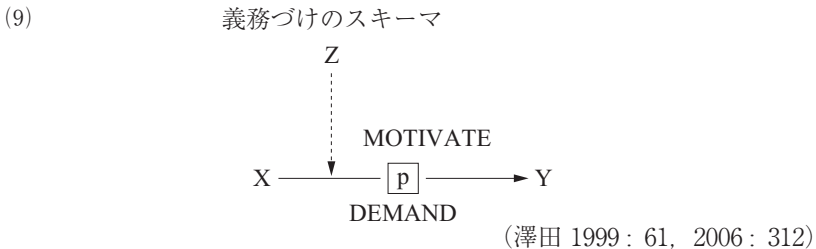
(7) (母の権力という) 直接的な力があなたに 10 時までに帰宅するように強制する。

Johnson (1987: 51) は、must のイメージスキーマを、「強制のイメージスキーマ」(compulsion schema) と称し、以下のように図示している。ここでの実線の矢印は直接的な力のベクトルを表し、 F_1 は義務づけの主体を表し、四角は義務づけの客体を表している。破線は、その主体がたどらざるを得ない事象の実現への潜在的な道筋を表している。



(8)では、「母の権力」が F に対応し、「あなた」が四角に対応する。また、実線の矢印は、母の権力のジョンに対する直接的な強い力を表し、破線の矢印は、10時までに帰る方向に向かわされるジョンがたどらざるをえない道筋を表している。

(8)から、義務づけは、主体が客体の自由意志を奪い、緊張関係を生みだしかねないものであることが明らかになる。澤田（1999：58ff.）は、このような場合、「理由」、「目的」、「条件」といった、義務づけのための「動機づけ」の関与があることを論じ、(9)のスキーマを提示した。なぜなら、それ相応の動機がなければ、相手に義務という負担を負わせることは不合理であるからである。このスキーマは、主体（X）の力の行使には、動機づけ（Z）が関与することを明示するものである。



ここでの X は義務づけの主体であり、Y は義務づけの客体であり、義務の着点（goal）である。p は義務の内容である。Z は義務づけの動機づけを表している。Westney（1995）や Smith（2003）などの研究などでも、motivation や motivational force といった「動機づけ」という術語が用いられている。それらの概念は、本研究における「動機づけ」と重なる面が少なくはないが、義務づけの主体と動機づけを区別してない点において特徴を異にする概念である。(9)によって捉えられる「動機づけ」の概念は、管見の限り、澤田（1999）によって初めて本格的に導入されたものである。その後、澤田（2006，2018）、長友（2009，2012，2013）によって研究の発展を見せている。おそらくは、この概念は、人のなす言語行為や人の心的態度の表出と深いかわりがある。言語行為や心的態度によっては、しかるべき動機づけがない場合には、意味が通らないことがあるからである。たとえば、(3)のような発話の場合、「なぜ？」という動機が問われよう。

動機づけは、「理由」、「目的」、「条件」といった意味内容によって実現する
場合が多い（澤田（2006：312-320））。

- (10) Now in Africa you *must* be careful of snakes because some of them are
poisonous.

(BNC F72 104) (以下、下線／斜体筆者)

- (11) To move explosively you *must* flex the knees slightly, keeping the upper
leg muscles under tension.

(BNC AOM 535)

- (12) All in all, if you want to keep a pet, you *must* choose very carefully.

(BNC BNL 2072)

(10)では、下線部の「有毒の蛇もいるから」という理由が、アフリカでは蛇に注意をしなければならないことの動機づけとして機能している。(11)では、「急に動くためには」という目的が膝を曲げなければならないことの動機づけとなっており、(12)では、「ペットを飼いたいというのなら」という条件が、とても慎重に選ばなければならないことの動機づけとなっている。

動機づけは、顕在的に明示される場合もあれば、潜在的に含意される場合もある。後者の事例において、澤田（2006：321-323, 2018：139-139）で論じられているように、動機づけが主語の概念の中に内在化されていると見なすことができるものがある。

- (13) All of a sudden Laura was in the river. ... I screamed and ran downstream
and got hold of her by the coat ; ... She was sopping like a wet sheep,
and I was pretty wet myself. Then I shook her. By that time she was
shivering and crying.

...

“... Now come on, you *have to* get dry ...”

(M. Atwood, *The Blind Assassin*)

(13)では、Laura が体を乾かせる必要がある理由（＝動機づけ）は、顕在的に述べられていない。「早く体を乾かす」ことは、主語の「ずぶ濡れのローラ」にとっては当然のことであり、「あなたはずぶ濡れだから」といった、主語の特徴から含意される自明な動機づけはここでは述べられていない。

3. モダリティとメンタル・スペース

Fauconnier (1994²) は、「メンタル・スペース」と呼ばれる概念を導入した。メンタル・スペースは、思考が進むにつれ、次々に構築される局所的な認知領域とされる。

- (14) ... when we engage in any form of thought, typically mediated by language (for example, conversation, poetry, reading, story telling), domains are set up, structured, and connected. The process is local: A multitude of such domains—mental spaces—are constructed for any stretch of thought, and language (grammar and lexicon) is a powerful means (but not the only one) of specifying or retrieving key aspect of this cognitive construction.

(Fauconnier 1994²: xxxvii)

いかなる形の思考であれ—典型的には言語（たとえば、会話、詩、読書、話の語り）によって媒介された思考であるが—領域が設定され、構造化され、結合される。この過程は局所的である。すなわち、たくさんのこうした領域（メンタル・スペース）が、どんな長さの思考に対しても構築される。言語（文法と語彙）は、この認知的構築の重要

な側面を指定したり，引き出したりするための強力な（しかし，唯一でない）手段である。

メンタル・スペース理論は，モダリティ・ムードの研究への貢献が期待される理論であるが，先行研究は非常に少ない（Boogaart and Fortuin 2016：520）。その中で，Lampert and Lampert（2000：247）は，(15)のような，

- (15) You *must* stop smoking in here.

(Lampert and Lampert 2000：247)

must 構文において，2つのメンタル・スペースの設定があることを，次のように指摘した。

- (16) ... in that [Reality/Base] Space an element **a** (you) located which is associated with property ‘smokes’ (this element is identifiable as the Agonist of TALMY’s Force Dynamics configuration) ; and, finally, this element’s counterpart **a’** in the focus space M associates the property ‘stop smoking’ ... M turns out to be the focus space of this particular Mental Space constellation, with *must* evoking the relevant Force Schema, that is, Compulsion.

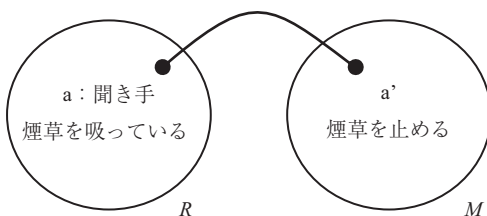
(Lampert and Lampert 2000：247)

現実／基底スペースには，聞き手に対応する要素 **a** が設定され，「煙草を吸っている」という特徴と結びつけられる（この要素は，Talmy の力のダイナミクスの構図における主動子として見なし得る）。そして，焦点スペース **M** の要素 **a** の対応物の要素 **a’** は，「煙草を止める」という特徴と結合する。（中略）**M** は，このメンタル・スペースの配

列における焦点スペースとなり, *must* は, 「強制」という当該の「力のスキーマ」を喚起する。

この分析の下で, (16)の促す「メンタル・スペース構成」(mental space configurations) (i. e. 「結合」されたメンタル・スペース) を図示すると以下のようになる。

(17)



ここでの円は, メンタル・スペースを表している。スペース R (eality) は現実スペースであり, 「話し手の現実」(speaker's reality) が成立している (Fauconnier 1994²: 17)。スペース R 内の a は, 「聞き手」に対応する要素であり, このスペース内では, 「煙草を吸う人物」という特徴をもつ。スペース M (ust) は, 力のスキーマが喚起されたメンタル・スペースであり, その内部では, 要素 a に対応する要素 a' は「煙草を止める」人物となっている。スペース M は, 「非現実」, すなわち, 何かをしなければならない事態としてのスペースと特徴づけられよう。要素 a と要素 a' を結ぶコネクターは, 双方が同一人物であることが表されている。

4. 法助動詞の力の強さ

Leech (2004: 100-101) は, *must* と *should* を比較し, *should* の意味を WEAKENED OBLIGATION としている。通例の用法において, *should* は, 主

語によって事象が実現されることに関しての話し手の確信の無さを表す。

- (18) In its most important uses, *should* has the same kind of meaning as *must*, except that it expresses not confidence, but rather lack of full confidence, in the fulfilment of the happening described by the main verb.

(Leech 2004 : 100)

同様の特徴づけは, Quirk et al. (1985 : 227), Coates 1983(58-59), Swan (2005 : 511) などにおいても見られる。Quirk et al. によれば, (19)のように, *must* とは対照的に *should* の場合, 勧められている内容が実行されることに関して, 話し手が確信しているという含意はない。Coates によれば, (20)のように, *must* の場合, 話し手は相手が要求される行為に従うことを予期しているのに対して, *should* にはそのような予期は関与しない¹⁾

- (19) ... but unlike *must*, they [*should* and *ought to*] do not imply that the speaker has confidence that the recommendation will be carried out.

(Quirk et al. 1985 : 227)

- (20) In the case of *MUST* the speaker expects to be obeyed, but in the case of *SHOULD* there is no such expectation.

(Coates 1983 : 58-59)

次の例を見られたい。

1) Mihill (1996 : 348) は *must* を次のように分析している。X *must* Y の場合, 話し手は X が Y をしないということは考慮に入れていないとされる。

(i) *MUST* : X *must* V

I can't think : X will not V

Other people will feel this is good

(Myhill 1996 : 348)

- (21) You {*must* / *should*} buy some new shoes. (Leech 2004 : 100)

Leech (2004 : 100) によれば、(21)で *must* が用いられた場合、聞き手が新しい靴を買うことが想定されるが、*should* が用いられた場合、そのような想定はなく、(22)のように、「ただ、あなたがそれを行うのかどうかは分からない」といった含意が看取される。

- (22) You *should* buy some new shoes
(... ‘but I don’t know whether you will or not’.)
(Leech 2004 : 101)

Leech (2004 : 101) による(23)–(24)の分析、Dixon (1991 : 171) による(25)–(26)の分析、Palmer (1991 : 123) による(27)に関しても同様である²⁾

- (23) Milo *must* pay for that broken window
(‘... and moreover he will do so, because I say so’).
(24) Milo *should* pay for that broken window
(‘... but he probably won’t’)
(23)–(24) : Leech 2004 : 101)

2) Palmer (1991 : 124) や Quirk et al. (1995 : 227) に指摘があるように、*should have* という表現は、通例、事象が実現しなかったことを含意する。

(i) They *should have* met her at the station. (‘... but they didn’t’.)
(Quirk et al. 1985 : 227)

Palmer によれば、*should/ought* において、事象の実現が含意されている事例がコーパスにおいて一例存在するが、その場合で話し手はその含意に対しての立場を明らかにしていないとしている。*should* の内部に否定的な心的態度が存在することは、*should* が日本語の「べき」と必ずしも対応しないことを意味しているように思われる。

- (25) I *must* finish this essay tonight
 (and I will, come what may)
- (26) I *should* finish this essay tonight
 (but I don't think I will)

(25)–(26) : Dixon 1991 : 171)

- (27) He {**must* / *should*} come tomorrow, but he won't.

(Palmer 1990 : 123)

本稿では、法助動詞の力の強さを(28)のように捉えておきたい。

- (28) 事象の実現が前提とされる場合、束縛的モダリティを表す法助動詞は強い力を表出する。

(28)から、本稿は *must* は強い力を表し、*should* は弱い力を表すとしておきたい。

had better は、(28)の観点からすれば、*must* と同様に強い力を表す表現として特徴づけることが可能である。Quirk et. al (1985 : 181 : 142) や Leech (2004 : 103) では、*had better* は、「強い勧告」(strong recommendation) と特徴づけられている。(29)は Huddleston and Pullum (2002 : 196) による *had better* と *must* と *should* との比較である。*had better* は *must* と同様に事象の実現を含意する。

- (29) He {**had better* / **must* / *should*} tell her but I don't suppose he will.

(Huddleston and Pullum 2002 : 196)

Westney (1995 : 182, 184) では、(30)–(31)の事例が提示され、*had better* と *should* では、前者においてのみ事象の実現が前提とされるとしている。

- (30) You'd *better* ask him when he comes in.

(* ... but I'm sure you won't.)

- (31) You *should* ask him when he comes in.

(... I but I'm not sure you won't.)

(Westney 1995: 182, 184)

5. 束縛的モダリティと動機づけ

5.1 must と動機づけ

法助動詞と共起する動機づけの好ましさと、法助動詞の力の強さには密接な関係がある。X or/otherwise Y により、X か Y かの二者択一を迫ることによって、話し手は強く X を強要することになる。よって、強い力を表出する法助動詞と好ましくない動機づけは調和すると考えられる。以下の事例においては、must が or/otherwise (=「さもないと」) で導入される好ましくない動機づけと共起している。

- (32) “You *must* leave or we will kill you”, the men said.”

(COCA FIC 2015)

- (33) Sedgewick shook his head. “You *must* begin immediately, or you will forfeit this opportunity.”

(COCA FIC 2017)

- (34) But once you require coverage, you *must* also regulate prices; otherwise insurers would set prices sky-high.

(COCA MAG 2008 Dec 8, 2008)

- (35) “Then, you *must* let me help, otherwise I will feel worthless.”

(COCA FIC 1995)

Lakoff (1972: 912) は, *must* の特徴の一つとして, 聞き手が話し手の指示を実行しないと, 何か都合の悪いことが起こることを含意するとしているが, (32)–(35)の事例はその見解を支持するものと言える。

次の例を考えてみよう。

(36) [コンテキスト: 話し手は山中でどの道を下ろうかと思案している]

I must go down this road {or / and} they may find me.

(澤田 2018: 148)

澤田 (2018: 148-149) が指摘するように, ここでの *they* が, 敵 (たとえば, 追っ手) を指している場合, *or* が選択され, *or* 以降は, 「さもないと, 奴らに見つかってしまうかもしれない」解釈される。すなわち, *must* は好ましくない動機づけと共起している。一方, *they* が味方 (たとえば, 救急隊など) を指している場合, *and* が選択され, *and* 以降は, 「そうすれば彼らが見つけてくれるかもしれない」と解釈される。すなわち, *must* は好ましくない動機づけと共起する場合もある (長友 2009: 86, 2012: 25)。X and Y により, X と Y を並列することによって, Y がとても良いことなので, X をすると Y という良いことがプラスされると述べられる。強く X を促すことは, 聞き手や話題の人物の利益を考慮する発話においては自然である。(37)–(40)は, *must* が好ましい動機づけと共起している事例である。

(37) “Before you climb the tree in the morning, you must get wax from your ear on your finger and rub it on the tree trunk. You *must* do this so the birds will come !”

(COCA MAG 2015)

(38) “I’m a busy man. I don’t want to stand around waiting.” “Very well. You *must* do it yourselves, so there will be no suspicion of trickery.”

(COCA FIC 2002 (Jun))

- (39) “All in due time,” Annabelle said. “In the meanwhile, you *must* practice your posture so you’ll know how to comport yourselves someday in the presence of such fine ladies.”

(COCA FIC 2012)

- (40) You are not good enough to stand before Christ yet. So you *must* throw away of yourself and then you will be OK to stand before Christ.

(COCA SPOK 2011 (110513))

長友 (2009: 86, 2012: 25) や澤田 (2018: 148-149) で観察されているように, *must* が好ましい動機づけと好ましくない動機づけの双方と共起し得ることは, (41)の事例によっても支持されよう。ここでは, 1つの *must* を含む発話に関して, 好ましい動機づけと好ましくない動機づけの双方が呼応している。

- (41) “The Chicago River is pouring in here. The wall between the river and the tunnels broke last night. If you don’t get out now you may all drown. You certainly will starve: it will soon become impossible to get aboveground to find food. *You must come with me.* We’re going to have to go back through the water. We’ll be able to get into the Pulteney and then we’ll get you medical care. *You must come with me.* If you don’t, you will all die.”

Emily tugged wildly on my arm. “We can’t go back. We can’t go back! Tamar, don’t let them take me back!”

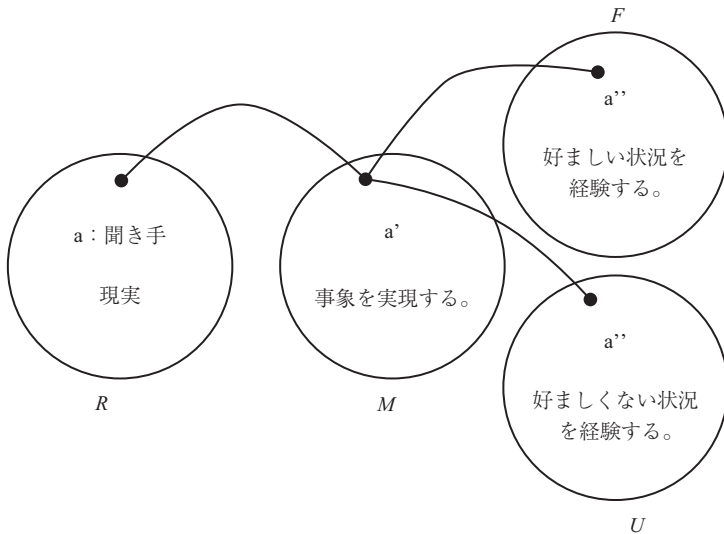
(S. Paretsky, *Tunnel Vision*) (斜体・下線筆者)

ここでは, 「エミー (=聞き手) はシカゴ川の水が流れ込んでいる場所にいる」という現実と, 「プルトニーのなかへ逃げこむことができる」と「お医者さん

に診てもらえることができる」という好ましい状況をもとに、「私と一緒に来なさい」と述べられている。次に、「さもないとみんな死んでしまう」という好ましくない状況を引き合いに出して、同様の発話が繰り返されている。

ここで、must の想起するメンタル・スペースを以下のように提出しておきたい。

(42) must 構文のメンタル・スペース構築：



現実スペース (R) では、聞き手の現実が表示される。たとえば(43)と(44)において、

(43) (= (32)) You *must* leave or we will kill you.

(44) (= (37)) You *must* do this so the birds will come !

スペース R 内では、聞き手は、それぞれ、「まだ立ち去っていない」人物と「こ

のことをしていない」人物である。スペース M(ust) は、力のスキーマが喚起されたメンタル・スペースであり、聞き手が力の行使を受けた結果の状況が成立し、このスペースでの聞き手は、事象を行う人物となる。(43)の場合、聞き手は「立ち去る」人物であり、(44)の場合、「このことを行う」人物である。スペース F (aborable space) は、must と呼応する好ましい動機づけの状況に関連するものである。このスペースにおいて聞き手は、事象を実現した後に生じる好ましい状況に遭遇する人物である。(44)の場合、聞き手は鳥が来るという状況を体験することになる。must の場合、好ましくない動機づけの状況とも呼応する。この動機づけの状況と関連するのが、スペース U (nfaborable space) である。スペース U は、スペース M 内の状況が実現されない場合に起こる聞き手にとって好ましくない状況を含む、「非実現スペース」(counter-realization space) である。(43)の場合、スペース U では、聞き手は殺されてしまう人物である。

5.2 had better と動機づけ

had better は、強い力を表出する表現であることを想定すれば、好ましくない動機づけとの呼応することが予測されるが、事実はその通りである。

- (45) “There,” said Lili after a final rub.

“There may be a mark, but it won’t show too badly. You’d *better* find a plaster for that thumb or it might start bleeding again.”

(BNC G06 851)

- (46) Her hair had grown and lay around her face and shoulders in wet ringlets.

The towel had slipped until it barely covered her nipples. He hooked a finger between her breasts and jerked the towel up to her chin.

“You *better* take a hot bath, or you’ll catch a cold.”

(Wordbanks)

(45)と(46)では、それぞれ、「さもないとまた出血をはじめてしまうかもしれない」と「さもないと風邪を引いてしまう」という、好ましくない動機づけが述べられている。

had better は、通例、好ましい動機づけとは共起しない傾向にあると考えられる。(45)と(46)の下線部を好ましい状況に置き換えると不自然な表現となる。

(47) ??You'd better find a plaster for that thumb, and it will heal up.

(48) ??You better take a hot bath, and you won't catch a cold.

前出の must の場合、(37)–(39)のように、so (=「そうすれば～」)によって好ましい動機づけが導入される事例がしばしば観察されるが、Corpus of Contemporary American English (COCA) コーパスにおいて、had better が好ましい動機づけの状況を導入する so と共起する事例は、1 例も観察されない。この事実は、had better の力の種類と関連があると思われる。Michell (2003: 146) が述べるように、had better には、「警告」や「脅し」の含意があり、had better は指令型の発話に従わない際の「さもないと～」といった言外の意味を伝達する³⁾。

(49) The meaning of *had better* is often said to include an implication of a warning or threat In deontic uses, this arises from hinting at the unspoken consequences of disregarding the directive (as in *You'd better drop that gun, or else ...*)

(Michell 2003: 146)

Palmer (1990: 82) は、(50)と(51)を提出し、

3) 「ぜひとも～しなさい」(=must) のような用法は、had better には観察されない。

(i) Oh, you {*must* / **had better*} come round and see it. (『勧誘』)

(cf. Palmer 1990²: 73)

(50) *You'd better* ask him when he comes in.

(51) *I'd better* take that down again.

((50)–(51) : Palmer 1990 : 82)

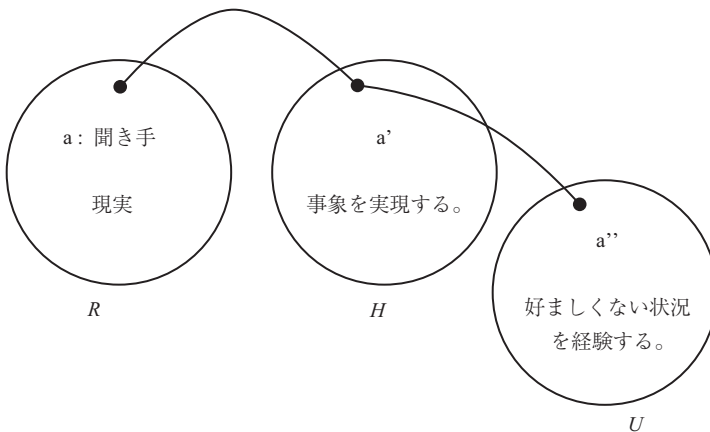
(52)のように特徴づけている。*had better* を用いて、話し手は最善の行動を「忠告」している。そして、話し手は「忠告」に対して揺るぎの態度をしており、行動に移されなかった際には、好ましくない結果が後続することがあるという含意が看取される。

(52) The speaker advises the hearer of his best course of action, and is fairly firm about his advice with the implication that unpleasant consequences may follow if it is not taken ...

(Palmer 1990 : 82)

(53)は *had better* のメンタル・スペース構築である。

(53) *had better* のメンタル・スペース構築：



現実スペース (R) では、聞き手の現実が成立する。たとえば、(54)において、

- (54) (= (45)) You'd *better* find a plaster for that thumb or it might start bleeding again.

聞き手は、スペース R 内では絆創膏を手に入れていない。had better によって構築されるスペース H(ad better) では、聞き手は、親指用の絆創膏を得る人物となる。スペース U は、スペース H での状況が成立しない場合に生じる、好ましくない動機づけの状況を含む。(54)の場合、聞き手は再度出血し得る人物となる。must との違いは、好ましい動機づけの状況を含むスペース F の関与が通例は観察されない点にある。

5.3 should と動機づけ

Lakoff (1972: 911) は、must との対比で、should の力のタイプを(55)のように特徴づけている。通例の用法において、should は、聞き手に軽視されることのある「忠告」(advice)を与える際に用いられる。

- (55) Going by the ordinary uses of the modals, *must* imposes an obligation, while *should* merely gives advice that may be disregarded

(Lakoff 1972: 911)

should は「助言」と関連するとする指摘は、Westney (1995: 166-167) や Carter and MaCarthy (2006: 653) にも見られる。Westney は、(56)のような should の事例は、通例、話し手自身の望みや「忠告」を含意するとしているとしており、Carter and MaCarthy は、(57)のような should は、最も一般的には「忠告」や「提言」(suggestion) を行う際に用いられるとしている。

- (56) You *should* see Mary some time.

(Westney 1995 : 166-167)

- (57) a. You *should* tell him straight what you think.

b. We *should* leave it till tomorrow, don't you think.

(Carter and McCarthy 2006 : 653)

強い強制の力を伴わない「助言」を表す *should* が、「さもないと悪いことが起こる」という「脅し」のニュアンスのある好ましくない状況と共に起るのは不自然である。一方、強制の度合いは低いものの、「助言」に従えば、良いことがあると述べるのは自然である。よって、*should* は、通例、聞き手にとって好ましい動機づけと呼応することが予測される。次の例を見られたい。

- (58) "... you *should* read Jane Austen and then you'll feel better."

(BNC BOH 439)

- (59) Kayla : Listen to this, Dad ! My school is having a baking contest.

Mr. Davis : That's wonderful, Kayla. You *should* enter. It will be a good chance to practice baking.

(COCA FIC 2009 (Oct 2009))

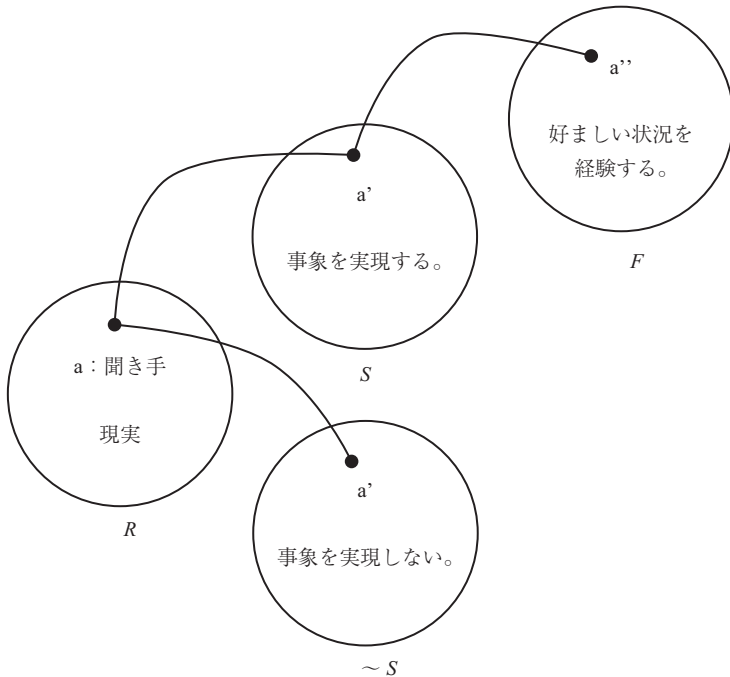
(58)と(59)では、それぞれ、「あなたは気分が良くなる」と「焼き方を練習する良い機会になる」という、聞き手にとって好ましい状況が動機づけとして想起されている。ここでの動機づけを、聞き手にとって好ましくない状況にすると、容認度の低い文となる。

- (60) ??You *should* read Jane Austen, or you'll regret later.

- (61) ??You *should* enter, or it won't be a good chance to practice baking.

また, The British National Corpus (BNC) の話し言葉コーパスにおいて, you should〜 と好ましくない動機づけを導入する典型的な表現である, 非対称的な or や, otherwise が共起する発話は, 一例しか存在しない。COCA コーパスにおいて, you should と (6 語以内に) otherwise が共起し, otherwise 以降で好ましくない事柄が述べられている事例は, you should が使用されている 315,796 例中, 6 例しか観察されない。ここで, should のメンタル・スペース構築を次のように提出しておきたい。

(62) should のメンタル・スペース構築：



現実が含まれるスペース R では(63)の場合,

(63) (=58) ... *you should read Jane Austen and then you'll feel better.*

聞き手はまだ *Jane Austen* を読んでいない。スペース S(hould) は、力のスキーマが喚起されたメンタル・スペースであり、聞き手が力の行使を受けた結果の状況が成立する。(63)では、聞き手は *Jane Austen* を読む人物となっている。*should* では、事象の実現は前提とされないため、力の行使を受けない可能性に言及するスペース～S(hould) の関与もあると考えられる。すなわち、*should* の内部に否定的な心的態度が存在する。(63)における聞き手は、スペース～Sでは *Jane Austin* は読まない人物である。このスペースの関与が *must* と *had better* とは対照的である。*should* の動機づけは、聞き手にとって好ましい状況になる傾向があるため、スペース F のみが設定され、スペース U は設定されない傾向にあると考えられる。(63)の場合、このスペース内では聞き手は気分が良くなる人物である。

6. お わ り に

本稿では、束縛的モダリティを表す *must* と *had better* と *should* に関して、力の強さと種類、動機づけ、メンタル・スペースの観点から分析を行った。*must* と *had better* は、強い力を表す表現、*should* は弱い力を表す表現と特徴づけることができる。さらに、*had better* は「脅迫」、*should* は「助言」の力と関連がある。力の特徴の違いにより、各表現と動機づけとの呼応関係が異なる。*must* は、好ましい動機づけと好ましくない動機づけの双方と共起し、*had better* は、好ましくない動機づけとのみ共起する傾向にあり、*should* は好ましい動機づけと共起する傾向にある。また、これらの特徴の違いはメンタル・スペース構築にも反映される。本稿では、主として（話し手の関与がある）「主観的モダリティ」を表す法助動詞の分析を行った。それぞれの表現は客観的モダリティを表すことがあるのか、もし客観的モダリティを表す場合、各法助動詞と動機

づけとの共起関係やメンタル・スペース構築はどのようなものであるのか、そもそも、メンタル・スペース理論は、モダリティの分析にとって、どのような意味を持つのか、メンタル・スペースと Sweetser の言う「領域」(domain) とはどのような関係があるのか、といった根本的な問題の議論に関しては、今後の研究に委ねたい。

* 本研究は、学術研究助成基金助成金（基盤研究（C）（18K00671））を受けたものである。

参 考 文 献

- Boogaart, R. and E Fortuin. 2016. Modality and Mood in Cognitive Linguistics and Construction Grammars. In Nuyts, Jan and Johan Van Der Auwera (eds.) *The Oxford Handbook of Modality and Mood*, pp. 514-533. Oxford : Oxford University Press.
- Carter, R. and M. McCarthy. 2006. *Cambridge Grammar of English : A Comprehensive Guide Spoken and Written English Grammar and Usage*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Coates, J. 1983. *The Semantics of the Modal Auxiliaries*. London : Croom Helm.
- Dixon, R. M. W. 1991. *A New Approach to English Grammar, on Semantic Principles*. Oxford : Clarendon Press.
- Fauconnier, G. 1994. *Mental Spaces : Aspects of Meaning Construction in Natural Languages*. Second edition. Cambridge : Cambridge University Press.
- Huddleston, R. and G. K. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge : Cambridge University. Press.
- Johnson, M. 1987. *The Body in the Mind : The Bodily Basis of Meaning, Imagination, and Reason*. Chicago : University of Chicago Press.
- Lampert, G. and M. Lampert. 2000. *The Conceptual Structure (s) of Modality : Essence and Ideologies*. Frankfurt an Main : Peter Lang.
- Lakoff, R. 1972. "Language in Context." *Language* 48 : 907-927.
- Leech, G. 2004. *Meaning and the English Verb*. Third edition. London : Longman.
- Mitchell, K. 2003. *Had Better and Might As Well : on the Margins of Modality ?* In Facchinetti, Roberta, Krug, Manfred. and Palmer, Frank. (eds.) *Modality in Contemporary English*, pp. 129-149 Berlin : Mouton de Gruyter.
- Myhill, H. 1996. "The Development of the Strong Obligation System in American English." *American Speech* 71-4 : 339-388.

- Palmer, R. F. 1990. *Modality and the English Modals*. Second edition. London : Longman.
- 長友俊一郎 (2009) 『束縛的モダリティと英語法助動詞』 リーベル出版.
- 長友俊一郎 (2012) 「英語モダリティと動機づけ」澤田治美編 『ひつじ意味論講座 第4巻 モダリティⅡ：事例研究』 pp. 17-35. ひつじ書房.
- 長友俊一郎 (2013) 「束縛的モダリティを表す(疑似)法助動詞をめぐって」『平成25年度科学研究費による国際モダリティワークショップーモダリティに関する意味論的・語用論的研究ー発表論文集』 4 : pp. 75-102.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English language*. London : Longman.
- 澤田治美 (1999) 「語用論と心的態度の接点」『言語』28(6) : pp. 58-63. 大修館書店.
- 澤田治美 (2006) 『モダリティ』開拓社.
- 澤田治美 (2018) 『意味解釈の中のモダリティ (上)』開拓社.
- Smith, N. 2003. Modals and Semi-modals of Obligation and Necessity. In Facchinetti et al. (eds.) *Modality in Contemporary English*, pp. 241-266. Berlin : Mouton de Gruyter.
- Sweetser, E. 1990. *From Etymology to Pragmatics : Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*. Cambridge : University of Cambridge Press.
- Tregidgo, P. S. 1982. "MUST and MAY : Demand and Permission." *Lingua* 56 : 75-92.
- Westney, P. 1995. *Modals and Periphrastics in English : An Investigation into the Semantic Correspondence Between Certain English Modal Verbs and Their Periphrastic Equivalents*. Tübingen : Niemeyer.